

林 純一

昭和42年8月1日の落雷事故の当日、私はテニスの合宿で学校にいました。最初はテントの支柱に雷が落ちたというようなことが伝わって大騒ぎになり、合宿どころではなかったことを記憶しています。ヘリコプターで遺体が降ろされ、校庭から講堂へ全員で見送ったときの深い悲しみは言葉には言い尽くせません。

事故から42年、卒業から40年という節目の年となり、追悼登山をしようという呼びかけがあって参加をさせていただきました。祝記念祭歌を歌いながら、ご遺族の皆様の無念さ、引率をされた先生方や一緒に登った仲間の皆さんのこれまでの心労はいかばかりかと改めて気づかされました。

逃げ場のない険しい岩場での恐ろしい雷鳴、一刻も早く安全な場所へ行きたいとの思いも、圧倒的な大自然の営みの中では叶わなかったそのことが今更ながら残念でなりません。11人の御霊よ安らかに眠ってくださいと手を合わせつつ、また来ることを誓って西穂高岳独標を後にしました。



伴 修次

ひとつ確実に言えるのは、我々、皆犠牲になる可能性を秘めていた中で、11名の仲間が、犠牲となったということです。犠牲という表現は、的を射ていない可能性もありますが……

翻って、残ったメンバーは、ある意味新しい命を彼らから託された形で、各自の人生を歩んでいると言えます。

日頃意識していなくても、21回生の意識のなかで、生とは何か、死とは何か、運命なのか、必然なのか、はたまた、生き方・行動指針等、自問自答する中で、彼らのことが、浮かんできます。

今回、40周年を機に、思いを馳せ、そして共有することは、我々にとっての、必須の課せられた使命であると考えられます。